

石原慎太郎『太陽の季節』論 —英子の死とその責任—

黒田 翔大

(日本文化学専門/博士後期課程)

1. はじめに

石原慎太郎が2012年に国政復帰を果たそうとする際に、週刊新潮において「石原新党」は太陽の季節か¹という特集が組まれた。このような特集が組まれるということから、石原と小説『太陽の季節』との結び付きが非常に強いことが伺える。

『太陽の季節』のイメージとして、例えば柴門ふみの「男根主義以外の何物でもない²」、岩佐壮四郎の「ファロス中心主義を刻印した作品といえ、誰でもまず思い浮かべるのは石原慎太郎の『太陽の季節』³」といったものが挙げられる。このように竜哉の男性中心主義性を非難するような捉え方が多い。

最近では2016年の都知事選において小池百合子を「厚化粧の女⁴」と批判したことが話題となったように、作者である石原の女性蔑視の言動など⁵を竜哉と安易に結び付けてしまっているからだと考えられる。しかし、そのような捉え方は表面的なものに過ぎず、作品自体を直視することの妨げになっているのではないだろうか。

『太陽の季節』は1955年に発表され、同年第1回文学界新人賞、翌年第34回芥川賞を受賞した作品である。芥川賞受賞の際の選者の対立を発端と

¹ 「石原新党」は太陽の季節か特集」（『週刊新潮』2012年11月8日号）、pp. 26-31。

² 柴門ふみ「日本レンアイ文学入門 第十三回 石原慎太郎『太陽の季節』」（『本の旅人』2005年3月）、p. 78。

³ 岩佐壮四郎「ファロセントリズム——石原慎太郎『太陽の季節』野坂昭如『エロ事師たち』」（『国文学』 解釈と教材の研究』2001年2月）、p. 116。

⁴ 『朝日新聞』2016年8月1日、朝刊14面。

⁵ 渡辺治、斎藤貴男ほか「座談会 石原慎太郎とは何か」（『ポリテイク』2004年9月）、p. 21。

して、『太陽の季節』をめぐる論争が起きた⁶。

そして映画化とその社会への影響から太陽族をめぐる社会問題なども起こることになる⁷。このような影響もあり、『太陽の季節』に関する言及は多いものの、作品自体についてのものは少ないというのが現状である。稲垣広和は『太陽の季節』の研究に関して次のようにまとめている。

太陽の季節を論じようとした場合、その小説自体が検討されることはあまり多くはない。むしろこの小説にまわりつく言説(当時の出版、マスコミの状況・日本の昭和三十年代の経済状況・若者の風俗・慎太郎の弟である石原裕次郎・映画「太陽の季節」・政治家としての慎太郎等々)によって「太陽の季節」という小説が一種の社会現象として捉えられている。

つまりこの「太陽の季節」という小説は、テキスト外部からアプローチされる強固な視点によって規定され閉じられたテキストであるといえよう⁸。

要するに、『太陽の季節』は作品の外部に関する事柄にあまりにも注意が向き過ぎ、その外部によって作品が語られてしまい、作品自体の解釈が十分になされていないということである。そもそも同時代においては、竜哉だけでなく英子も含めた若者たちの態度が批判の対象とされており、竜哉の男性中心主義的な態度が大きく注目されるのは作家石原の影響を大きく受けた現代的な見方である。そのため、作品の内部に目を向け作品分析を

⁶ 「太陽の季節」論争は、舟橋聖一と佐藤春夫による享楽論争と、中村光夫と亀井勝一郎による賭博性論争との二つに整理することができる。享楽論争は文学の良風美俗をめぐるものであり、賭博性論争は作家の作品発表の態度をめぐったものである(糸川光樹「『太陽の季節』論争」『国文学 解釈と鑑賞』1970年6月、pp. 122-126)。

⁷ 太陽族とは石原慎太郎や石原裕次郎の影響を受けたものであるが、むしろ「ヤクザ-愚連隊-太陽族というヒエラルキーに位置づけられる「犯罪集団あるいは犯罪予備軍」とみなされていたこと」が指摘される。そこに、太陽族に対する厳しい批判があった。(市川孝一「高度経済成長期の若者文化」——「太陽の季節」と太陽族ブーム——『文芸研究』2013年2月、pp. 235-236)。

⁸ 稲垣広和「『太陽の季節』論——「読み」の試み——」(『中京大学文学部紀要』2006年4月)、p. 120。

行うことで、『太陽の季節』の男性中心主義性を詳らかにする必要があるのである。

本稿では、竜哉の英子に対する接し方の変化と英子の死に対する考察を行う。これらに言及することで、作品内部から『太陽の季節』における竜哉の男性中心主義性、そして石原の男性中心主義性の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 竜哉の歪み

竜哉は英子に対して素直に接することができず、その帰結として英子の死がある。その要因として、竜哉がボクシングにおける相手選手の抵抗に対する喜びや感動といったものを、英子との関係に持ち込んでしまったことを挙げることができる。

まず英子との出会いから、竜哉の英子に対する心情の変化を確認していく。

いざ誘いかける段となっても、あんな女はどう、こんなのはどうと、女にかけてはそれぞれ一見識ある彼等が、選り好みする間、二丁目から四丁目五丁目と来、今度は又裏通りをうろうろする裡、並木通りの角の帽子屋で三人同じ年頃の、それも揃って派手に着飾った英子達を西村が見つけた。「先ず顔を良く見て、面がハクけりゃ」と言う間に買い物を済ませた彼女達が店を出て来る。三人よく似てはっきりした目鼻立ちに、英子だけが右の脛が一重で左が二重と言うところまでいち早く見て取った⁹。

竜哉たちは、自分たちの基準に合格している「ハク」い三人組に声を掛けようとする。次節において触れるが、三人組の服装に注目すると「派手に着飾った英子達」とあり、さらに乗用車の普及率が1%未満の時代に自動車を

⁹ 石原慎太郎『石原慎太郎の文学』9巻、文藝春秋、2007年、p. 77。
※以後、本論では書名とページ数のみを記載する。

所有していることから英子が富裕層であることが伺える¹⁰。

竜哉は三人組の中で特に英子を気に入ったため、ナイトクラブにおいて英子をほとんど独占する。その5日後、竜哉はボクシングの試合に出場し、英子が声援を送る中勝利を収めるものの、相手の頭が激しくぶつかり出血してしまう。竜哉は試合後に怪我の治療のため、英子に病院へ車で送ってもらう。しかし、英子は病院に竜哉を届けるとすぐに帰ってしまい、そんな英子に対して竜哉は「何だか拍子抜け」をしてしまう。そして、怪我の治療が終わる頃に病院に電話が掛かってくる。

小さな傷だったが、後々のため綿密な治療で、彼は一時間以上寝かされていた。終り近くなって看護婦が入って来、

「津川さん居られますか、お電話ですが」

「治療中。用事なら聞いといて上げなさい」

彼が帰り掛けに尋ねると受附の看護婦は、

「用件お聞きしましたら、未だいらっしゃるなら良い、様子はどうでしょうかと訊かれたので治療中と答えときました。それだけです」

「江田だな、竜哉は思って外に出た¹¹。」

竜哉は江田からの電話だと思うが、実際は竜哉がまだ病院にいるかどうかを英子が確認するために掛けたものであった。英子は病院に竜哉がいることを確認し、待ち伏せをする。英子のその行動は、竜哉の「先程の軽い失望を見事に満たすことになる。このように、竜哉は英子に対して素直な好意を抱いており、ボクシングの関係を適用していないことが伺える。

しかし、それに変化が生じることになるのは竜哉が英子と初めて性的関係を結ぶ場面においてである。

二日間続きの離れには、不必要に大きな二間の廊下、と言うよりはホ

¹⁰ 橋本健二『「格差」の戦後史——階級社会 日本の履歴書【増補新版】』河出書房、2013年、p. 114。

¹¹ 『石原慎太郎の文学』9巻、pp. 81-82。

ールが有り、体操用のマットが敷かれ、太い梁からサンドバックが吊してある。彼女はそれを叩いてみた。重いバッグは少しも窪まず、掌には意外に固くざらざらした荒いカンヴァスの肌ざわりが感じられる。英子は何故か嬉しくなって小さく声を立てて笑った。

風呂から出て体一杯に水を浴びながら竜哉は、この時始めて英子に対する心を決めた。裸の上半身にタオルをかけ、離れに上ると彼は障子の外から声を掛けた。

「英子さん」

部屋の英子がこちらを向いた気配に、彼は勃起した陰茎を外から障子に突き立てた。障子は乾いた音をたてて敗れ、それを見た英子は読んでいた本を力いっぱい障子にぶつけたのだ。本は見事、的に当って畳に落ちた。

その瞬間、竜哉は体中が引き締まるような快感を感じた。彼は今、リングで感じるあのギラギラした、抵抗される人間の喜びを味わったのだ。

目を開いた彼女を眺める竜哉の眼差しには、試合での強敵に対する一種敬意と親愛の情があった。敗れた自分を覚った時彼を襲ったのは、試合で遭遇した強敵に対してもう一度ぶつかり直して行こうと言う、いわば復讐への喜びと感動であった。が所詮復讐の情愛は残忍な喜びに変るものではないだろうか。何故彼は、最初英子を抱き上げた時の、あの未知の喜びを大切にしなかったのだろうか¹²。

ここでの出来事から、竜哉の英子に対する考えに変化が起こっていることが伺える。竜哉は「リングで感じるあのギラギラした、抵抗される人間の喜び」や「試合での強敵に対する一種敬意と親愛の情」を抱き、作品冒頭にあるように、「竜哉が強く英子に魅かれたのは、彼が拳闘に魅かれる気持と同じようなもの」となってしまう。中村三春はボクシングとの関係を英子に適用することを「スポーツとセクシャリティにおける〈征服と抵抗〉とし

¹² 『石原慎太郎の文学』9巻、p. 88。

との関係¹³」だと述べている。竜哉がボクシングに魅力を感じるのは、試合相手からの抵抗があるからだ。「手非道く負かされる事のない勝負に熱中」することはできないし、そんなものは「退屈も加えて、決りきった手数を費やす煩わしさ」に過ぎない。竜哉は抵抗をする英子に対してボクシングでの試合相手と同じものを感じているわけであり、だからこそ英子に「喜びと感動」を受ける。これ以降、竜哉はその関係においてでしか英子と接することができなくなってしまうのである。

ここでもう一度、二人が初めて性的関係を結ぶ場面に注目する。この場面は、英子がサンドバッグを叩くという行為から始まっている。このように竜哉が必ずしも主導していたわけではないことが伺えるが、英子側からは次のように捉えられている。

一体どんなつもりで彼女は竜哉を抱いたのだろうか。

あの時英子にとっての竜哉は、彼女が今まで交渉して来た男達と同じような男の一人ではなかったろうか。英子が身をまかせた男達は、終ってみれば結局、皆同じでしかなかった。(中略)それは彼女の為の閨房の飾りなのだ。あの陶醉に包まれた世界では、多少の相違はあれ彼等は唯の男でしかなかった。英子には彼等からそれ以上を求めることが出来ない¹⁴。

英子が「竜哉を抱いた」と表現されていることから、単純に竜哉が一方的に英子と性的関係を結んだのではないことが分かる。性的関係を結ぶ場面では、英子にとって竜哉は「閨房の飾り」であり、英子が主導したという一面も見ることができる。英子の男を「飾り」として扱う行為によって、竜哉の英子に対する気持ちに変化が生じる。竜哉が英子とボクシングを引き付けて考えるようになったのは、竜哉の性格などの問題に加えて、こうした英子による行為とも関係しているのである。

¹³ 中村三春「太陽の季節」(『国文学 解釈と鑑賞』2008年4月)、pp. 109-110。

¹⁴ 『石原慎太郎の文学』9巻、pp. 90-91。

竜哉は抵抗者としての英子にしか喜びを見出すことができなくなっていく。そのため、竜哉と英子のお互いの気持ちが一体化するように見える場面はあるが、竜哉と英子とでは捉え方に大きな違いがある。

ヨットは次第に均衡を持ち直しながら、ゆらゆら揺れている。それは二人にとって嘗て知り得なかった、激しい陶酔と歓楽の揺籠ではなかったろうか。英子も竜哉も、その時始めて互いの体を通して、捜し求めていたあの郷愁のあてどころを見出したのだ。二人は時折、ふと動作を止めてじっと耳を澄ました。ヨットは相変らず水を叩いて揺れている。それを確かめると、眼を覚まし自分の周りを見て満足し再び眠る赤ん坊のように、二人はもう一度夢を見始めるのだ。

港の裏山から月が上ろうとしている。竜哉の肩の下から英子はそれを眺めた。彼女はこの月の出に、自分が愛し得たことを信じた。そしてその光りがますます高く明るくなり、昼間のように二人だけを照らすのを願った。この時英子は始めて、安っぽいお月様の物語を信じ切れる女になったのだ。何故か月が翳んで見えた。彼女はやっと自分の涙に気がついた¹⁵。

「英子も竜哉も、その時始めて互いの体を通して、捜し求めていたあの郷愁のあてどころを見出した」とあり、竜哉と英子の両者がお互いに一体感を抱いているように見える。しかし、大塚英志は英子からの視点で描かれており竜哉の視点を回避していることから、「強調されるのは相手を「愛した」のはあくまでも英子であり、龍哉ではない¹⁶」と指摘している。確かに、ここでの場面は英子からの視点はあるものの、竜哉からの視点では描かれていない。英子にとっては大きな転換点であっても、竜哉にとっては「俺だってこんなこともあるんだ」という程度に過ぎないのである。もっとも、竜哉にとって全く変化が見られないというわけではない。

¹⁵ 『石原慎太郎の文学』9巻、p. 99。

¹⁶ 大塚英志『サブカルチャー文学論』朝日新聞社、2004年、pp. 541-542。

翌る朝十時に起きると、欠かさぬ朝のトレーニングの後で、朝食をとる竜哉に英子から電話が掛った。

「――別に用はないの。でも今日もおいでになって。唯何となくお逢いしたいわ」

「ただなんとなくか」

それでも彼は言われる通り出向いて行った¹⁷。

英子は「別に用はない」と言う。しかし、電話とは何か用件を伝達するために使われるものである¹⁸。本当に用件がないわけではなく「何となくお逢いしたいわ」と続けるように竜哉に会うことが目的であり、直接的な肉体を媒介しないで竜哉に素直な気持ちを伝えることにもなっていると考えられる。それは、「始めて英子を抱いて踊った時英子に、彼がすぐ彼女の裸を想像してみなかった」竜哉が本来求めていたものだ。そのため、竜哉は「ただなんとなくか」と言いながらも、英子に会うために東京へ出掛けるのである。

以上のように、ヨットでの出来事によって竜哉にも何らかの心境の変化は確かにあったのかもしれない。しかし、英子に対する素直な気持ちは一時的なものに過ぎなかった。「あの時とは別なんだ」と、竜哉は英子に抵抗を求め冷たく当たるようになっていく。そのうちに「英子の眼に、あの挑むような眼差」が復活し、竜哉は「下をむいて笑う」。竜哉は抵抗をする英子との関係にしか喜びを見出せなくなってしまうのである。

3. 英子の死の責任

英子は竜哉の子どもを妊娠することになるが、人工妊娠中絶の影響により死んでしまう。それは、竜哉が明確な返事をせずに先延ばしを続けたことにより、英子の中絶を行う時期が遅れたことに原因がある。英子が妊娠

¹⁷ 『石原慎太郎の文学』9巻、p. 101。

¹⁸ 吉見俊哉、若林幹夫ほか『メディアとしての電話』弘文堂、1992年、p. 48。

を告げてから死に至るまで順を追って確認していく。

英子が竜哉に妊娠を告げるのと竜哉が中絶を命じるのは次の場面である。

「わかったでしょ。赤ちゃんが出来てるのよ。今日もそれを言いに来たの」

「誰の」

彼は残酷な問い方をした。

「何を言ってるの、貴方の子供よ」

「どうかな。兄貴のじゃないか」

「そんなこと日数からしてありえないわ。もう三月よ」

「あのトランペット吹きがいるじゃないか」

「馬鹿ね、あんな人何もしなかったわよ。それよりもどうする？」

「どうするって」

「生んで良い？」

竜哉ははっきりと言い渡した。当然予期していた答えを、気を持たされた挙句今になって聞かされ、英子は寂しそうな顔をして頷いた。

彼女は入院した。胎児は四ヵ月を越している。唯の掻把手術が困難となり、骨格の都合で帝王切開が行われた。

そして手術後四日、英子は腹膜炎を併発して死んだ¹⁹。

妊娠三ヵ月というのは掻爬法での中絶手術が可能な最後のタイミングである。そのタイミングでの告白に対し、竜哉は「でも赤ん坊がいたって悪かねえやな」と曖昧な返事をする。一応の許可を得たと考える英子だが、その後不安になり竜哉に再度確認をするも、曖昧な返事しかもらうことができない。竜哉は一ヵ月の間英子を引っ張っておくが、子どもを抱いたチャンピオンの写真を見た竜哉は、英子に中絶させることを決心する。竜哉の気まぐれにより、引っ張られ続けた英子は中絶を行い、その結果として死に至る。英子の死は竜哉によって中絶の時期が遅らされたからだということ

¹⁹ 『石原慎太郎の文学』9巻、pp. 111-112。

ができる。

1948年に優生保護法が成立し中絶が合法化され、1949年の改正で経済的理由の条項を追加、1952年には中絶の手続きの簡易化によって、人々にとって中絶がより容易なものとなった²⁰。優生保護法に基づいて報告される中絶件数を見ると、1953年から1961年の間は100万件以上であり、1955年は最大の117万件である²¹。実際、新聞記事から人工妊娠中絶を10回以上行う者²²、頻繁に行う者²³がいたことが伺える。

また、1955年の中絶件数は妊娠三ヵ月以内の者が90%以上を占めており、早期化の傾向が進んでいた²⁴。三ヵ月以内に墮胎を行うという習慣は以前からあったものではないが²⁵、1948年の優生保護法で人工妊娠中絶が合法化され、三ヵ月以内の場合は掻爬法で中絶を行うということが広く認知されていた。そのため、竜哉は英子に中絶手術を受けさせるのであれば、妊娠三ヵ月以内に行うべきだということは理解していたであろう。

すでに確認したように服装や普及率が1%未満の時代に自動車を所有していることから、英子が富裕層であることが伺える。そのことは、竜哉が道久と英子を売買する場面からも分かる。

翌日、道久は郵便で五千元を受け取った。しかし竜哉は道久を唆し、再び同じ約束を結んだのだ。道久は気を咎められたが、一向自分には冷たい英子へのしっぺ返しのつもりで契約を交わした。

英子は言った通り、又五千元を払って寄こした。それを知って竜哉が三度道久に申し入れた時、彼は言った。

「もう良い加減にしてやれよ。やはりあの娘はお前にホレてるよ」

が竜哉は無理矢理に二千元で約束させ、英子には五千元と報告して三千のサヤを兄に与えた。道久はちゃっかりそれを受取るとさすがに

²⁰ ティアナ・ノーグレン『中絶と避妊の政治学』青木書店、2008年。

²¹ 湯沢雍彦『昭和後期の家族問題——一九四五～八八年 混乱・新生・動揺のなかで』ミネルヴァ書房、2012年、pp. 134-135。

²² 『朝日新聞』1954年4月15日、夕刊2面。

²³ 『読売新聞』1956年1月16日、夕刊2面。

²⁴ 太田典礼『墮胎禁止と優生保護法』経営者科学会、1967年、p. 190。

²⁵ 岩田重則『〈いのち〉をめぐる近代史』吉川弘文館、2009年、p. 122。

言った。

「もう絶対に厭だ。女を泣かすのは悪い趣味だぞ」

その額が二万円に成ったのに気づいた時、彼は奇妙な感動に打たれた。拳闘の試合で、こちらがポイントすれば必ずそれだけ打ち返してくる、言わば五角のしぶとい相手に対するような感嘆でもあった²⁶。

英子は自身が道久に売られる度に竜哉に送金をする。1955年時点では、中学卒の初任給は男子4090円、女子3890円であり、大手企業・中堅企業の男性ホワイトカラーの平均賃金は18343円である²⁷。このことから、英子は非常な大金を竜哉に送り続けていることが伺える。つまり、英子は親から容易に金を得ることができるということになる。また、英子は相当遊んでいる人物として描かれているが、親から注意を受けているようなことは少なくとも作品内には示されていない。

以上のことから、英子は金銭面における子どもの扱いに対しての障害は一般的な場合と比べると小さいと考えられる。竜哉が三ヵ月以内に中絶を希望する旨を伝えれば、英子は手術を受ける選択ができ死を避けられたかもしれない。また、竜哉が生むかどうかの判断をしなくても「何処かに預けておくわ」というように私生児として育てることもできたのである。竜哉は英子からそれらの選択肢を消去させ、すでに掻把手術のできない四ヵ月目での中絶手術を行うことになるのである。

竜哉は英子の死を幸子からの電話で知らされる。

そして手術後四日、英子は腹膜炎を併発して死んだ。

友人の幸子から電話でそれを聞かされた時、竜哉は低く笑って言った。

「嘘をつけ」

「本当です。お葬式は明後日だそうです」

²⁶ 『石原慎太郎の文学』9巻、pp. 110-111。

²⁷ 注10に同じ、pp. 113-114。

何時もと変って幸子の声は妙に冷たかった。

彼は嫌な気がした。かえって、これで一生英子と離れられないような気持に襲われた。それは矛盾してはいたが、妙にしつこく頭に絡んだ。今切った電話が又鳴った。交換手が何か饒舌った。彼は叩きつけるようにそれを置いた。

「チェ、どじをしやがって」

かすれた声で呟いてみた。彼は自分を咎めているような気がし急いで頭を振った²⁸。

英子の死を告げる幸子の声は「妙に冷たかった」とある。これは電話を介した声であるからではなく、幸子の声が竜哉に対する強い非難が帯びているからである。幸子の声に友人である英子の死に対する竜哉への非難があるのは当然のことである。

そして、竜哉が英子の葬式に出席するのは次の場面である。

花に埋もれて英子の写真が置かれている。それはあの蓮っ葉な笑顔と、挑むような眼つきであった。写真に向って頭も下げず彼は暫く立っていた。親戚の誰かが、置かれた香の小箱を動かして示した。頷いて香をつまみながら彼は英子の写真を見詰めた。笑顔の下、その挑むような眼差に彼は今始めて知ったのだ。これは英子の彼に対する一番残酷な復讐ではなかったか、彼女は死ぬことによって、竜哉の一番好きだった、いくら叩いても壊れぬ玩具を永久に奪ったのだ。つまんだ香を落とすと、彼は思わず香炉を握りしめいきなり写真に叩きつけた。

「馬鹿野郎っ！」

額はけたたましい音をたてて滅茶苦茶に壊れた。花籠が将棋倒しに転げ落ちた。動揺する人々に、彼は陰しい眼を向けて振り返った。

「貴方達には何もわかりゃしないんだ」

そのまま部屋を出て行く竜哉の眼に、幸子は始めて涙を見た。竜哉

²⁸ 『石原慎太郎の文学』9巻、p. 115。

はそんな自分が歯ぎしりする程癪だった²⁹。

竜哉は葬式で英子の写真を見る。そこに、英子の「挑むような眼つき」を見て、英子の抵抗だと受け取るが、そこに喜びや感動はない。なぜなら、英子はこれ以上竜哉に抵抗することが不可能になったからであり、英子を死という形で失ったからである。竜哉は「貴方達には何もわかりやしないんだ」と叫ぶが、竜哉の身勝手な言動の結果だということは明白であろう。

4. おわりに

本稿では、石原の男性中心主義性を『太陽の季節』の作品内部から検討することを目的とした。従来では、竜哉を作者である石原と重ね合わせて捉えられる傾向が強かった。そこで、作品内部に目を向けて竜哉の男性中心主義性を明らかにしようと試みた。

竜哉が英子との恋愛にボクシングの関係をもち込んだのは、二人が初めて性的関係を持った際である。竜哉は英子の抵抗をボクシングの試合相手の抵抗と重ね合わせて捉えるようになってしまう。そして、英子が時期の遅れた中絶手術の影響によって死に至るのは、竜哉の曖昧な態度によって中絶手術の時期が遅れてしまったことに原因がある。竜哉の言動によって、英子は死を回避することができたのである。

以上のように、『太陽の季節』は竜哉の身勝手さを伺うことができる作品である。竜哉の男性中心主義性を直ちに作者の石原と接続することには問題があるものの、その一端を垣間見ることができるのではないだろうか。

²⁹ 『石原慎太郎の文学』9巻、pp. 115-116。